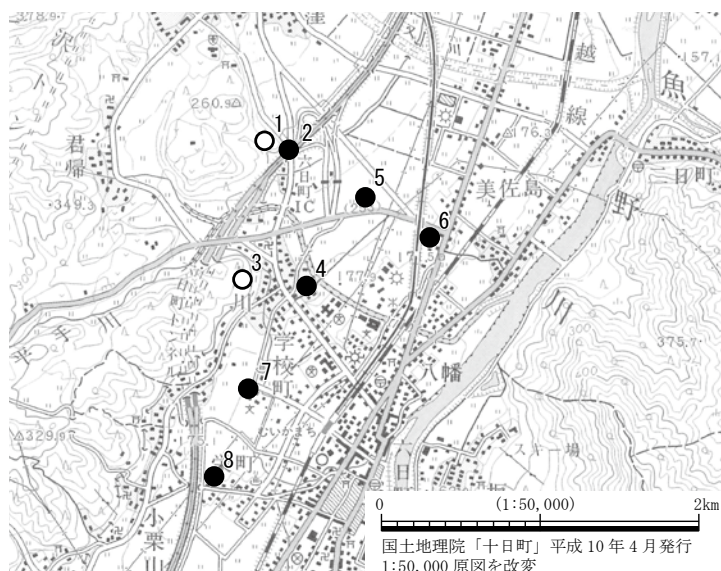


南魚沼市蟻子山 32 号墳について

小 野 本 敦・工 藤 祐 大

はじめに

蟻子山古墳群は、魚沼丘陵東麓の独立丘に営まれた、古墳時代中・後期を中心とする群集墳である（第1図）。新潟県中・下越地方では、古墳時代中期に古墳の分布の中心が新潟平野から山間部の魚野川流域へ移行することが知られるが〔甘粕 1986、坂井 1995〕、蟻子山古墳群は近接する飯綱山古墳群とともにこうした時代の転換点を象徴的に示す古墳群であり、1972（昭和 47）年に新潟県の史跡に指定されている。しかし、蟻子山古墳群に関する研究は、近年の発掘調査によって様相が明らかになってきている飯綱山古墳群とは対照的に、ほとんど進んでいない。



- | | | | |
|----------|---------|----------|----------|
| 1 蟻子山古墳群 | 2 金屋遺跡 | 3 飯綱山古墳群 | 4 余川中道遺跡 |
| 5 坂之上遺跡 | 6 大清水遺跡 | 7 北沖東遺跡 | 8 長表東遺跡 |

第 1 図 蟻子山古墳群と周辺の古墳時代遺跡

本稿では、かつて新潟県教育委員会（以下、県教委）が調査し、当事業団が保管している蟻子山 32 号墳の調査記録と出土遺物を紹介し、蟻子山古墳群および魚沼地域の古墳時代社会を考える一助としたい。なお本稿の執筆は、3（2）を工藤が、それ以外を小野本が担当した。遺物の実測・写真撮影はそれぞれの文責者が行った。

1 調査の経緯

（1）既往の調査歴

蟻子山古墳群に関する最初の学術的報告は斉藤秀平によるもので、松谷時太郎による古墳の分布図等が掲載されている〔斉藤 1932〕。1960 年代の立教大学による測量調査では、91 基が確認された〔中川ほか 1963〕。以後、古墳名は立教大学の命名を踏襲している。

地元住民による発掘は明治年間に盛んであったようで、多くの古墳に既掘坑が確認でき、古墳群出土とされる遺物が地元で保管されている。一部は中川ほか前掲書や新潟県による調査〔金子ほか 1977〕で図

化され、蟻子山古墳群出土遺物の様相を窺い得る貴重な資料となっている。

1960 年代から 70 年代にかけては、開発により古墳の破壊が進んだ。その中で 87 号墳の発掘調査が行われている〔池田 1973〕。また、32 号墳やその周辺の小円墳はテニスコート造成に伴う盛土によって埋没した。

1999 年から 2003 年にかけて新潟大学による測量調査が行われ、64 基の古墳の現存が確認されている

[新潟大学考古学研究室
蟻子山古墳群測量調査
団 2004]。また、70・72
号墳が併せて前方後円
墳の可能性があること、
68号墳が帆立貝式古墳
の可能性があること、そ
れまで古墳群中で最大規
模（29.5 m）と考えられ
ていた5号墳の墳丘長
が20ないし25 m程度で
あることなどが指摘され
た。

（2）32号墳の緊急調査

本稿で組上に載せる蟻
子山32号墳は、丘陵の
東裾に立地する。『新潟
県史』[新潟県 1983]に

よるグルーピングでは、5号墳を含む「第3群」に属する（第2図）¹⁾。

1982年、上述のテニスコート脇を通過する県道の拡幅工事について県の担当課から県教委に対し照会があった。県教委は盛土の開削によって古墳が破壊される恐れがある旨を伝え、県教委が確認調査を行うことで合意した。

調査は同年10月14日から27日にかけて行われた。盛土の法面を徐々に撤去していったところ、古墳に伴うと考えられる「石組み」が検出された。位置的に32号墳と推定されたため、協議の結果、工法を変更して法面を擁護壁で維持することとした。これにより古墳は現状保存され、確認調査の後には再び盛土下に眠ることとなった。

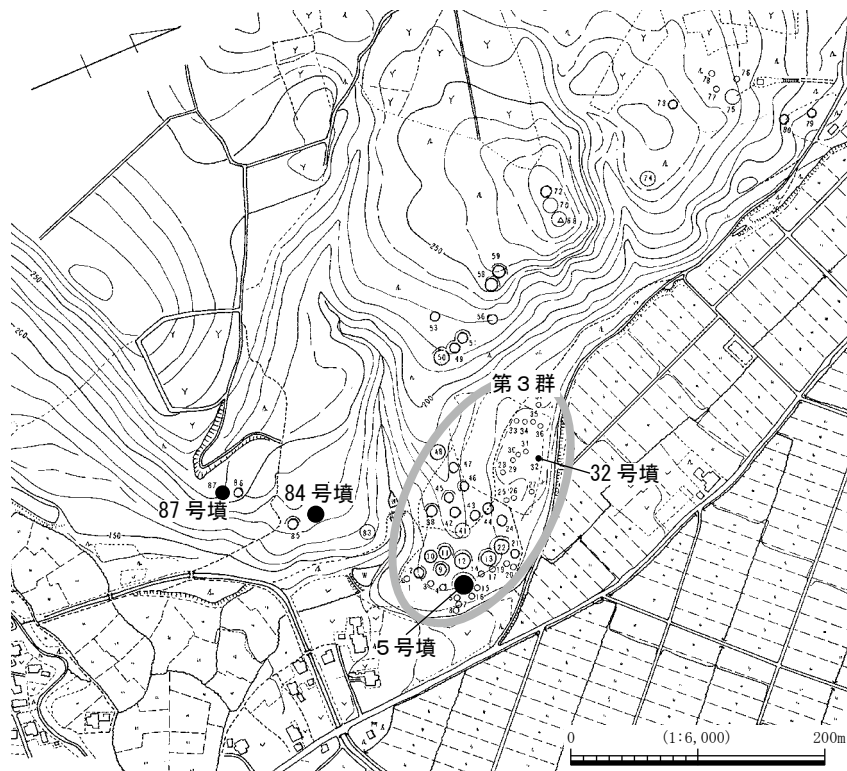
2 調査資料について

調査時に撮影された写真類（写真図版3）について、調査担当者からの聞き取りをもとに解説する。

1・2は「石組み」の検出状況である。「石組み」より上層の土はテニスコート造成時に大きく攪乱され、墳丘盛土はほとんど旧状をとどめていないと判断した。なお、土師器類は「石組み」よりやや上位から、刀子は「石組み」の間から出土した（3～5）。管玉の出土地点は不明である。

次に攪乱が及んでいると思われる部分の石を除去し、断ち割りを行った（6）。その結果、「石組み」は黒色土中に構築されたことが判明し、それより下位の層からはピットが検出された。黒色土層からは縄文土器が出土しており縄文時代の包含層と考えられることから、ピットは縄文時代の所産と考えられる。

以上の状況から、調査時の所見では、「石組み」は地山である縄文時代の包含層上に整地や盛土をほとんど行わずに直接構築されたものと判断した。また、原位置を保つ「石組み」は拳大から人頭大の川原石を主体としてほぼ水平に構築される一方、原位置を動いたものの中にはより大ぶりなものが認められるこ



第2図 蟻子山古墳群

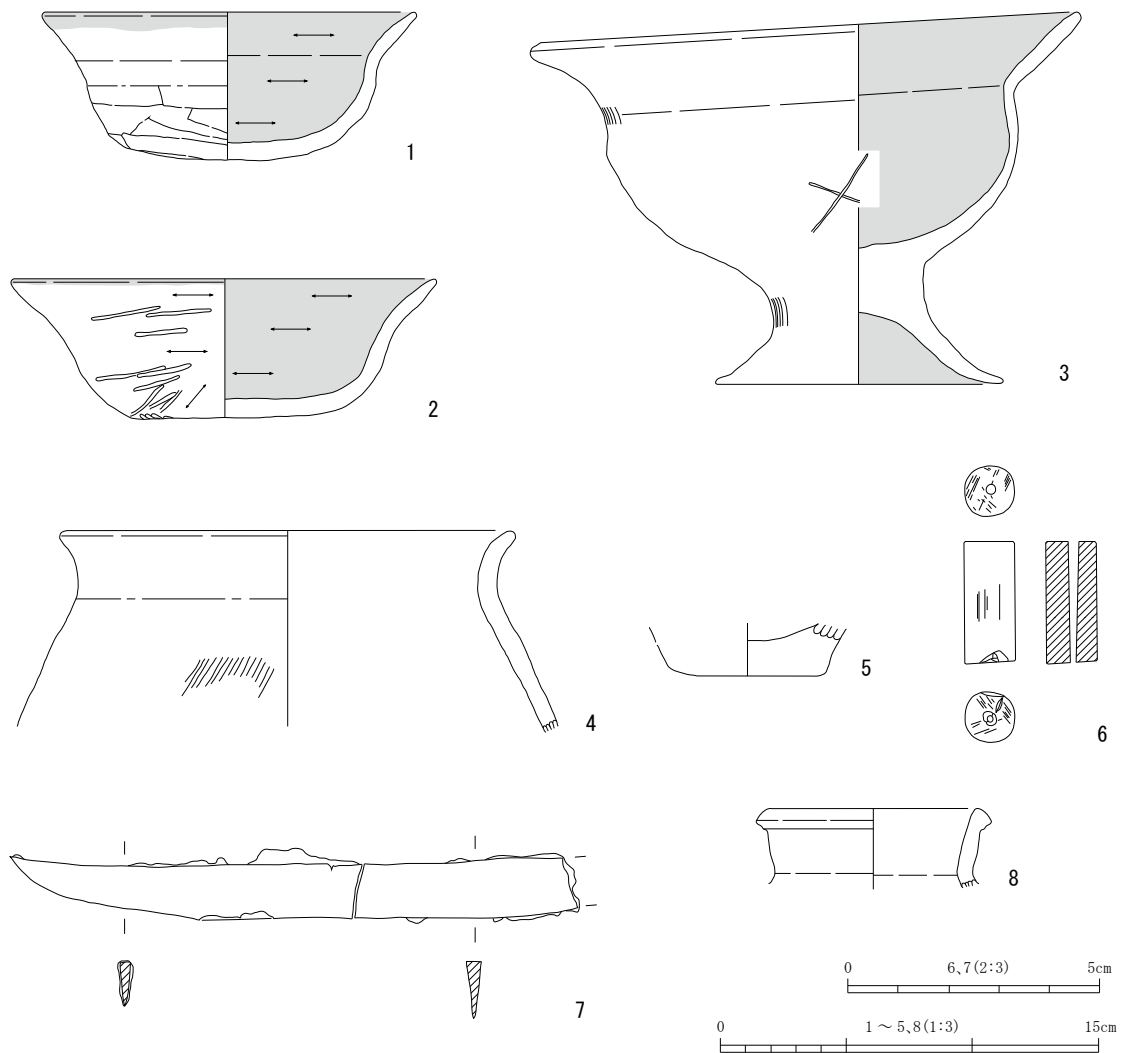
とから、前者は埋葬施設の床面に相当し、後者は側壁に用いられたものと推定した。

3 出土遺物（写真図版4 参照）

（1）古墳時代以降の遺物

第3図1は土師器の杯である。体部は底面がやや扁平な半球形で、口縁部が緩やかに外反する。調整は底面に一方向のミガキ、体部下半に右上がりの斜め方向のミガキ、体部上半から口縁部及び内面に横方向のミガキが施される。内面は黒色処理がなされている。外面の色調はにぶい黄橙色を呈する。胎土には石英、長石、赤色粒を含み焼成は普通である。

第3図2は土師器の杯である。体部は半球形で、口縁部が緩やかに外反する。調整は外面にケズリ、内面に横方向のミガキが施される。外面調整のケズリは1にみられるミガキが省略されたために現れたもので、1の外面調整もケズリ→ミガキの順に行われたと思われる。内面は黒色処理がなされている。色調・焼成・胎土は1と類似する。これらのほかに、杯と思われる土師器片は3点存在する。いずれも内面は黒色処理がなされている。



第3図 古墳時代以降の遺物

第3図3は土師器の高杯である。体部は半球形で、口縁部は大きく外反する。全体のプロポーションが不均衡で、稚拙な作りである。体部下半に×状の線刻が施される。脚部は短くハの字状に開く。器面のひび割れが著しく調整痕は不明瞭であるが、体部から口縁部にかけての屈曲部及び体部と脚部の接合箇所に粗いハケメが認められる。内面はミガキが施される。体部および脚部の内面は黒色処理がなされている。外面の色調はにぶい黄橙色を呈する。胎土には石英、長石、雲母、小石を多く含み焼成は普通である。

第3図4は土師器の甕である。このほかに甕と思われる土師器片は42点あり、このうち底部の形状が把握できる1点を図化した(第3図5)。口縁部は短く外反し、先端は丸みを帯びる。外面調整は不明瞭ながら右上がりのハケメが確認できる。細片資料の中にはケズリと思われる調整痕が確認できるものもある。内面調整は不明であるが、やはり細片資料の中にケズリを行うものがある。また、内面にはわずかにコゲが付着している。外面の色調はにぶい黄橙色を呈する。胎土には石英、長石、小石を多く含み焼成は普通である。

第3図6は緑色凝灰岩の管玉である。図の上方から下方に向けて穿孔され、下方の穴の周囲にはその際の剥離痕が認められる。

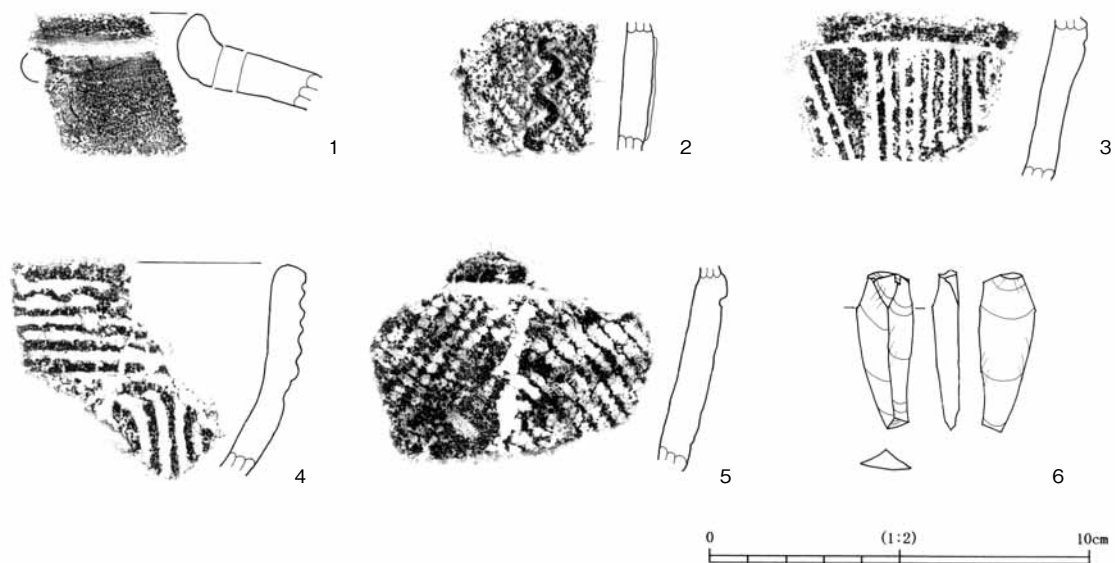
第3図7は刀子である。茎を欠損し、関の形態は不明である。刀身の長さに対して身幅が狭く細長い形状である。

第3図8は珠洲焼の壺R種である〔吉岡1994〕。胎土に海綿骨針を含む。

(2) 縄文時代以前の遺物

第4図1は有孔浅鉢の口縁部破片である。器形は口縁端部で短く外折するもので、口縁の屈折部付近には孔が確認できる。胎土は緻密で角閃石や石英を含み、色調は明赤褐色を呈する。諸磯b中段階以降の浅鉢に比定できる。

第4図2は深鉢の胴部破片である。地文には横羽状縄文が施され、粘土紐が縦位で鋸歯状に貼り付けられている。色調はにぶい黄橙色で、胎土には石英や長石が含まれる。縄文時代前期と考えられる。



第4図 縄文時代以前の遺物

第4図3は深鉢の口縁部破片である。半截竹管による縦位の平行沈線と、上部には横位の沈線が確認できる。胎土には石英や長石が含まれ大きめの白い礫が目立つ。外面の色調は橙色である。縄文時代中期初頭と考えられる。

第4図4は深鉢の口縁部破片である。口縁上半には半截竹管による横平行沈文と、交互刺突による鋸歯文が認められる。下部は縦位の平行沈文が施文されている。全体の色調は明黄褐色で、胎土には石英や長石が含まれる。

第4図5は深鉢の胴部破片ある。土器片上部には半截竹管状の工具による横沈線が走る。下部には縦位の羽状縄文が施文されている。色調は浅黄橙色で、胎土には石英や長石に加え5mm程度の角礫を多く含む。縄文時代中期前葉と考えられる。

第4図6は縦長の剥片である。打面調整がされている。鉄石英製で末端が欠損している。

4 まとめ

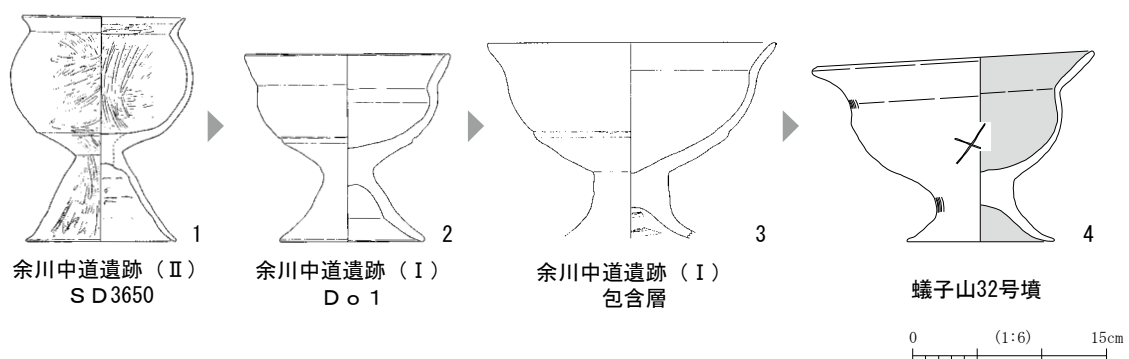
(1) 土器からみた32号墳の築造年代²⁾

上述のように遺物の出土状況は必ずしも明確でないものの、以下では第3図1～7を蟻子山32号墳に伴う遺物と捉えて議論を進める。

魚沼地域における古墳時代の資料は豊富とは言えず、一遺跡内で土器の変遷が追える遺跡は十日町市馬場上遺跡〔新潟県十日町市教育委員会 2003〕が挙げられる程度である。馬場上遺跡においては、TK 47型式の須恵器を伴う段階から内面黒色処理技法が認められ始める。蟻子山32号墳出土の供膳具は図示できなかった細片も含め、すべてに内面黒色処理が施されている点から、TK 47型式期より新しいと考えられる。

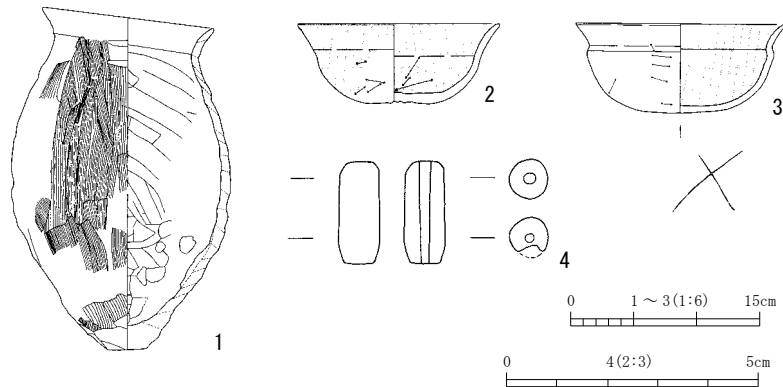
杯の形態の変化に関しては、南魚沼市来清西遺跡の検討によって、身の深いものから身が浅く口縁部と体部の間の稜線がはっきりしないものへと変化することが指摘されている〔安達 2002〕。蟻子山32号墳の杯2点の法量やプロポーシオンは安達分類のB 1類に相当する。ただし第3図2は口縁部と体部の境がやや不明瞭であることからB 2類への過渡的な様相ともとれる。B 1類・B 2類ともMT 15～TK 10型式の須恵器との共伴事例がある。近隣での類例は、南魚沼市余川中道遺跡D o 296や同大久保遺跡出土例(第6図2)が挙げられる。

高杯は、近隣で類例を求めるとすれば滝沢分類のF類〔滝沢 2014〕からの系譜が追える資料と思われる



第5図 高杯変遷案

る。この想定が正しければ、高杯F類は、時期が降るにつれて体部下半の稜線が簡略化してついには消失するとともに、口縁は開き、脚部は短くなるという方向で形態変化が進むと考えられる（第5図）。年代決定の根拠とはならないが、本例は高杯F類の最も後出的な様相とみることで、杯の年代観と矛盾はしないであろう。



第6図 大久保古墳群出土遺物

いであろう。なお、上半を欠損するが蟻子山古墳群出土遺物中には本例と類似した脚部が知られており（『新潟県史』資料編1の図版566-2）、32号墳から採取されたか、同時期の古墳が他にも存在する可能性が指摘できる。

以上のように、須恵器が共伴しないことや杯2点の形状が微妙に異なることから年代を確言することは躊躇されるが、土器からみた蟻子山32号墳の築造年代はTK47型式期よりは新しく、TK10型式期を大きく降らないものとみて、古墳時代後期前半、実年代では6世紀前半代と考えておきたい。なお、蟻子山古墳群に隣接する集落である金屋遺跡では、当該期の生活痕跡は希薄であるものの、坂之上遺跡では古墳時代後期の土器や祭祀遺構が検出されており、注目される〔安達2014〕。蟻子山古墳群造営集団の居住地に関しては、やや視野を広げて検討する必要があるだろう。

（2）蟻子山古墳群の構成と被葬者の位相

蟻子山32号墳が位置する「第3群」は、最大規模の5号墳を含む古墳群中で最大の支群である。微視的にはやや標高の高い場所に5号墳をはじめとする大規模墳が立地し、その周囲の丘陵裾を32号墳などの小円墳が取り巻いており、被葬者間の階層差を想定できる。32号墳出土遺物は、蟻子山古墳群における下位の階層の供献品の構成を示すものと言える。

32号墳出土遺物の組成は、杯の形態からはほぼ同時期と考えられる魚野川右岸の大久保古墳群と類似する（第6図）。ともに土師器に×状の線刻を施すものがある点も注目できる。大久保古墳群で検出された円墳は、いずれも墳丘径10m未満と小規模である点からも蟻子山32号墳に近いランクの被葬者が想定できる。同時期・同地域の小円墳の出土品の組成に共通性がある点は興味深く、古墳祭祀や副葬品に関して何らかの約束事が存在した可能性も一考に値しよう。

（3）「石組み」をめぐる

発掘調査で検出された「石組み」が調査時の所見のとおり埋葬施設に伴うものであるとしても、大きく攪乱されている点や図面類が残されていない点から詳細な構造について議論することは難しい。写真だけから判断すれば横穴式石室の床面のようにも見えるが、現状での魚野川流域における横穴式石室の受容はTK43型式期と考えられる点からすれば〔小黑1999〕、上述した出土土器の年代観により、「石組み」を横穴式石室とは断定できない。

蟻子山古墳群で確認されている石材を用いた堅穴系の埋葬施設としては、明治期に発掘された推定84号墳の「扁平石で二重に構築した堅穴式石室」があるものの、川原石を用いた確実な事例はこれまで知ら

れていない。ただし、金子らや新潟大学の踏査で「墳丘内に石あり」「既発掘坑内部に石材あり」とされたものが「第3群」に多く存在する点は注目でき、32号墳に類似した埋葬施設が存在する可能性もある。今後、蟻子山古墳群の学術的な調査が実施される中で、「石組み」の再評価がなされることを期待したい。

おわりに

本稿では、未報告であった蟻子山32号墳の調査記録と出土遺物の資料化を試みたが、諸々の制約と筆者の力量不足により、遺構・遺物の解釈ともに不十分な点を残したことは否めない。とは言え、蟻子山古墳群出土遺物は、これまで確実に出土古墳が特定できるものが皆無であったことを思えば、今回これを図化して提示できたことを小さな成果としたい。

近年、飯綱山古墳群の膝元に位置する余川中道遺跡の発掘調査などによって、南魚沼地域の古墳時代の資料は充実しつつある。近い将来、地域編年の枠組みの中に32号墳の土器群を位置付けることを誓って、拙い報告を終えることとしたい。

本稿の執筆に際し、中島栄一氏、山本肇氏、新潟県教育庁文化行政課より当時の状況についてご教示を得た。また、安達聡氏からは文献の手配などでご高配を賜った。末尾ながら記して感謝申し上げる。

註

- 1) 『新潟県史』の編纂時点ではすでに32号墳は埋め立てられていたため直接の記載はないものの、立地的に第3群に含まれるとみてよからう。
- 2) 本来であれば、当地域の出土土器による編年を構築すべきであるが、その準備は整っていない。そこで、年代の尺度としては須恵器編年を用いる。須恵器の型式名は田辺昭三（1981）に従い、実年代との対比は大阪府立近つ飛鳥博物館（2006）に依拠した。

引用・参考文献

- 安達 聡 2002「第5章 まとめと今後の課題 第3節 土師器について」『来清西遺跡』塩沢町教育委員会
- 安達 聡 2014「南魚沼市内の弥生～古墳時代遺跡」『平成25年度越後国域確定1300年記念事業 記録集』新潟県教育委員会
- 甘粕 健 1986「大和政権の越佐進出ルート」『新潟県史』通史編1
- 池田 亨 1973『六日町の文化財』
- 大阪府立近つ飛鳥博物館 2006『年代のものさし 陶邑の須恵器』
- 小黒智久 1999「横穴式石室」『新潟県の考古学』新潟県考古学会
- 金子拓男ほか 1977「伊乎乃郡の古墳」『南魚沼』新潟県文化財調査年報第15 新潟県教育委員会
- 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2012「蟻子山古墳群」『埋文にいがた』No.80
- 斉藤秀平 1932「南魚沼郡余川群集墳」『新潟県史蹟名勝天然紀念物調査報告』3 新潟県
- 坂井秀弥 1995「古代越後平野の環境・交通・官衙」『木簡研究』17 木簡学会
- 滝沢規朗 2014「新潟県における古墳時代中期の土器について（上）一器種分類と基準資料の提示一」『三面川流域の考古学』第13号 奥三面を考える会
- 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
- 中川成夫ほか 1963「新潟県魚野川流域古墳群の調査」『史苑』24—1 立教大学史学会
- 新潟県 1983『新潟県史』資料編1 原始・古代一 考古編
- 新潟県教育委員会 1985『金屋遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第37集
- 新潟県教育委員会・公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2015（刊行予定）『余川中道Ⅱ 金屋遺跡Ⅲ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第253集
- 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2001『大久保遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第101集
- 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2004『余川中道遺跡Ⅰ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第139集
- 新潟県十日町市教育委員会 2003『馬場上遺跡発掘調査報告書』

新潟大学考古学研究室蟻子山古墳群測量調査団 2004「蟻子山古墳群測量調査報告」『新潟大学考古学研究室調査研究報告』6
橋本博文ほか 2001「飯綱山 27・65 号墳の調査」『新潟大学考古学研究室調査研究報告』3
余川誌編集委員会 1990『余川誌』
吉岡康暢 1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館

図出典

第2図：[金子ほか 1977] を改変
第5図1：[県教委ほか 2015] 図版 113 の 248
第5図2：[県教委ほか 2004] 図版 23 の 14
第5図3：同図版 32 の 255
第6図：[県教委ほか 2001] 図版 5 の 3・13・15・17